地域づくり表彰

ネバーランド株式会社（長野県根羽村）

風と遊ぶ、緑に染まる森
GreenKingdom　ねばーらんど

ネバーランド株式会社
副支配人兼料理長
桒原　幸一郎

１．根羽村の概要

根羽村は、愛知県・岐阜県と県境を接する長野県最南端に位置し、愛知県豊田市・安城市等を流域とし、117 ㎞先の三河湾へと流れ込む矢作川の源流になります。年間平均雨量が2,000㎜と高冷多湿な気候は杉・桧の生育に適しており面積89.95㎢のうち約92%が森林で、古くから林業を基幹産業としてきた村です。

古くは三河国足助荘（現在の愛知県）に属していたため方言・風習は三河方面と同様ですが、武田信玄の三河侵攻により信州(現在の長野県)に編入されました。

愛知県安城市に事務所を持つ「明治用水土地改良区」が大正３年に水源涵養を目的とした山林を購入したのをはじめ、水源地を活用した上下流交流活動も近年は盛んに行われています。

■ネバーランド株式会社の概要

根羽村が55%を出資する第３セクター方式により平成８年４月に設立し、取締役４名、社員11名、常勤パート５名で運営しています。業務内容には、乳製品製造販売、豆富製品製造販売、そば・うどん製造販売、レストランでの「ジビエ」加工販売、地域特産物の販売、宿泊施設運営などがあります。

ネバーランド全景

２．活動開始の背景・経緯

根羽村では過疎化、少子高齢化が進行する中、他市町村では地域活性化方策の一つとして温泉施設の建設等大型投資を進める中にあって、基幹産業である林業に力を入れ続けてきました。

そんな中、平成５年に村民有志50名が集まり、「根羽村」を元気にする方法を考えるため「水」「食」「木」の３つの部会を立ち上げ、それぞれ研究を行った結果、地元酪農家で搾乳した生乳を使った乳製品の加工販売、地下水を活用した豆富やそばの加工販売のための施設を、村の木材を使用して建設するのが最良と結論付け村に提言し、村ではその提言に基づき、住民の意思を充分に反映し、住民と行政がしっかりとタッグを組んだ形でネバーランド設立に向け具体的に動き始めました。

開業にあたり、人員をいかに確保するかが最大の課題でしたが、全国紙の求人募集を初めて利用し人員確保を図った所、予想を上回る反響があり、Ｉ・Ｕターンを含め強力な人材を確保することができました。

■オリジナル商品の開発・販売

ネバーランドでは、開業当初から地元で生産される素材を活用することを基本にオリジナル商品の開発、製造を行ってきました。

特に、村内の酪農家で搾乳された生乳を65度30分で低温殺菌した、根羽牛乳やヨーグルト、アイスクリーム、ソフトクリームについては大変好評を得ています。

ヨーグルトに関しては、開業当初は、ヨーグルト本来の酸味の強い風味を味わって頂くためプレーンヨーグルトのみの販売でしたが、学校給食への提供のため、甘味を加えた商品を新たに開発するなど、市場ニーズへ即座に対応するなどして、販売の拡大を図ってきました。

また、村のきれいな地下水を使用した昔ながらの堅豆富、そば、うどんの製造など、一貫して地域に密着した商品作りを続けてきました。

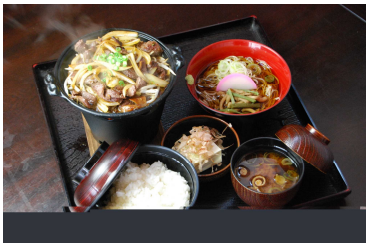
近年は、遊休農地解消策の一環として村内でそばの栽培を奨励し、収穫されたそばをネバーランドに卸すことにより地元農家の収入増にもつながっています。

オリジナル乳製品

また、平成19年からは、それまで有害鳥獣として処分されていた鹿を処理、加工しオリジナル商品としてレストラン、売店で販売したところ、罠で捕獲し現場で血抜き処理された上質な肉質の上、安価な事もあり県内外で大きな評判となりました。

当初、村の猟友会会員とネバーランドの副支配人兼料理長との個人的なつながりの中で、捕獲された鹿肉の一部を食用として提供していたところ、「ジビエ」としての製品化への方策を検討し、加えて、Ｉターンでネバーランドへ就職した桑原ならではのアイデアで愛知県にも販路を見つけ、レストランでの提供以外に処理後の肉の安定した販路確保により、相当数の鹿の処理、加工が可能となりました。

社員の名前と顔をﾊﾟｯｹｰｼﾞに
使用した店頭販売用鹿肉



「鹿の猟師焼き定食」

処分するしかなかった鹿の商品化により、猟友会員の収入増にもつながり、会員の志気も向上し現在では、猟友会員が食品衛生管理責任者の資格を取得し、自分たちで捕獲した鹿を処理まで行う程に定着し、地域活性化の一端を担うものとなっています。

第３セクターとはいえ、株式会社である以上、利益を確保することが大前提である訳ですが、開業当初、中京圏からの多くの通行客の入り込みを期待し、特に冬場には近隣のスキー場への来訪客の入り込みを期待していた所、予想に反し大幅に利用客が減少したのを契機に「待ちの商売」から「攻めの商売」へと転じて行きました。

地元産の素材を使った製品のため、「安心･安全」「地産地消」を全面に、まずはオリジナル商品（自社製品）の販路拡大のため、村内はもちろん近隣市町村の学校給食に使用してもらえるよう努めました。

続いて、愛知県内の生活協同組合での店舗販売をお願いするともに、愛知県内の大規模なハイウェイオアシス、飯田市内の量販店、バスターミナル等での店舗販売を始めることができました。近年では、愛知県を拠点とするプロサッカーチームが、隣接する豊田市内で試合を行う際にそば等を販売するため出店したり、昔から関係の深い愛知県安城市の学校給食に使用してもらうなど、販路拡大、売上の増加に加え、根羽村のＰＲに大きな役割を果たしてきました。

■地域活性化・地域間交流の拠点としての役割

根羽村は愛知県、岐阜県に県境を接し、愛知県名古屋市と長野県塩尻市とを結ぶ主要国道 153 号線が通り、古くは「塩の道」「中馬街道」の要所として、愛知県へ注ぐ一級河川「矢作川」の源流として、愛知県を中心に他地域との交流が盛んな地域でありました。

こうした中、地域資源を活用しながら他地域住民との交流を通した地域づくりを進める中、手つかずの自然との調和、国道沿いという立地のよさもあり、加えて施設内には芝生広場、野外ステージ等もあり、多くの人が集まるには格好の施設であり、地域活性化、地域間交流の拠点と位置づけられてきました。

近年は村で 50 年以上続く植樹祭の中心会場として、村内はもちろん村外からも多くの参加者を迎え盛大に植樹祭を開催することができ、特に愛知県安城市からは毎年多くの参加者が訪れるようになりました。

流域住民も参加の植樹祭
(ﾈﾊﾞｰﾗﾝﾄﾞ芝生広場)

また、全国からクラフトマンが集まる「手仕事市」の開催や、人と人との交流に重点を置いた「ねば恋来まつり」や、県境という地域を象徴したネーミングの「クロスロードコンサート」の開催など、当初は村当局と始めたイベントも、現在は参加者、ネバーランドが中心となり、定期的に開催されるようになり、地域活性化、地域間交流の進展に大きく寄与しています。

県内外から参加して開催
された「ねば恋来まつり」

３．課題と展望

株式会社であるため､利益の確保、経営の安定が最大の課題の一つであると認識をしています。

そのため、地域資源の再発見、活用を念頭に新たな商品アイテムの開発等に取組み、経営の安定化を図りながら地域への貢献度を高めて行きたいと考えます。

■村と協働しての地域づくりに 向けての努力

根羽村は古くから林業立村を標榜し林業に力を入れ、現在は「伐採・加工・販売」を村内で完結し、住宅用材として提供する「トータル林業」の仕組みが確立し、「林業」分野では全国から視察に訪れるまで成長しました。

加えて、全国に先駆け、平成 16 年に根羽村を源流とする「矢作川」の下流域にある、愛知県の自動車部品メーカーのアイシングループ５社と「森林の里親契約」を結び、企業と協力、連携した森林づくりを進める中で､企業の従業員の方をはじめ、都会の人達が森林に接し、森林整備の重要性、環境について考えてもらうためのきっかけとするための、イベント等も多く行われるようになり、年間を通して根羽村、ネバーランドを訪れる人が増えています。

「ネバーランドの森」での
遊歩道づくり体験

全国的な傾向とはいえ、少子高齢化が進み、現在は人口 1,200 人程の過疎地域ですが、村にあるもの、住む人全てが宝であり、貴重な資源であると認識し、積極的に活用し、「地域に人が住み続けられるため」「オンリーワンの地域づくり」を目指し、ネバーランドを訪れた人達に根羽村全体の魅力を少しでも理解してもらい、リピーターとなってもらえるよう努力を行うとともに、村外で行われるイベント等にも積極的に出向きネバーランドの商品を通じ、根羽村の情報発信を行い、「根羽村応援団」を増やしていくことが地域活性化の原動力になり、ネバーランド、村双方の発展につながるものと確信しています。

村の地域活性化、産業振興の拠点として期待されて建設された施設であり、今後も村と協働で当初の目的達成、発展に寄与できるよう、より安定した経営を継続できるよう努力していきたいと考えています。